



Data	
監督:	ジャスティン・チャドウィック
原作・脚本:	デボラ・モガー
出演:	アリシア・ヴィキャンデル/ クリストフ・ヴァルツ/ディ ン・デハーン/ホリデイ・グ レインジャー/ジャック・オ コンネル/ジュディ・デンチ /ザック・ガリフィアナキス /トム・ホルンダー/カー ラ・デルヴィーニュ

👁️👁️ みどころ

チューリップ・フィーバーって一体ナニ？1975年に間寛平が歌って大流行した「ひらけ！チューリップ」の歌と関係があるの？いやいや、本作はそんなお気軽な映画ではなく、17世紀の先進国オランダで起きた“チューリップ・バブル”と、その中で“肖像画に秘めた愛”を描いた高尚な映画だ。

オランダといえばチューリップ、運河、絵画、フェルメール、青いドレス等が次々と連想できるし、それによって本作の骨格が浮かび上がるが、本作では、女2人の企みによる“替え玉作戦”の展開に注目！

その作戦は無事に成功するものの、その後の各自の生き方の選択は？予定調和的な結末に少し不満もあるが、私はこんな歴史モノが大好き！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■チューリップ・フィーバーとは？まずそれをしっかり！■□■

本作の邦題は「チューリップ・フィーバー」だが、「肖像画に秘めた愛」というサブタイトルがついている。しかし、原題は「Tulip Fever」のみだ。しかし、「チューリップ・フィーバー」って一体ナニ？チューリップと聞けば、私は花のチューリップではなく、学生時代によく通っていたパチンコ台のチューリップを思い出す。弁護士登録直後の1975年にはお笑いタレント、間寛平が歌った「ひらけ！チューリップ」というコミックソングも大流行していた。パチンコ台のセンターのみならず、あちこちで“咲いている”のは間違いなくチューリップ（を模したもの）だから、チューリップが開きっぱなしになれば、まさにチューリップ・フィーバー！したがって、本作はそんなパチンコの映画？一瞬そうも考えたが、『リリーのすべて』（15年）『シネマ38』（43頁）、『エクス・マキナ』（1

5年)『シネマ38』189頁)でその美しさを際立たせた女優アリシア・ヴィキャンデルが主演する本作がそんな映画であるはずがない。

『プライドと偏見』(05年)『シネマ10』198頁)の脚本家で、『マリーゴールド・ホテルで会いましょう』(11年)『シネマ30』165頁)の原作者として知られている英国の人気作家デボラ・モガーが原作と脚本を書いている本作のタイトルとされた「チューリップ・フィーバー」とは、17世紀にオランダで起きたチューリップの球根への投機熱を意味するチューリップ・バブルによるフィーバーのことだそう。なるほど、なるほど・・・。

30年間続いた平成の時代が終わるについて、今から10年前の2008年に発生した“リーマンショック”のことがよく語られているが、日本にとって最大かつ最悪のバブルは1989年～90年にかけての土地バブル。それには株とゴルフ会員権のバブル(フィーバー)も伴っていたが、なぜ17世紀にオランダでチューリップ・フィーバーが発生したの?また、その実態とは?本作では、何よりもまずそれをしっかり確認したい。

■□■オランダといえば絵画、そして、絵画といえば?■□■

東京では2018年10月5日から2019年2月3日までフェルメール展が開催されている(大阪でも2019年2月16日から5月12日まで)が、オランダといえば絵画、そして、絵画といえばゴッホやピカソなどの巨匠と並んで有名で日本人が大好きなのがオランダの画家フェルメールだ。また、フェルメールといえば、その代表作は「真珠の耳飾りの少女」で、同作はスカーレット・ヨハンソン主演で映画化もされている(『シネマ4』270頁)。

本作のパンフレットには、中野京子の「名画を生んだドラマティックな時代」と題するEssayがあり、それを読めば、なぜ17世紀にオランダのような小国が栄えていたのかがよくわかる。また、オランダの名物は風車とチューリップと運河だが、司馬遼太郎の『街道をゆく(35) オランダ紀行』には「どうも、この町がすきである」と書かれている。本作の邦題には「肖像画に秘めた愛」というサブタイトルがついているが、チラシやパンフレット上の、青色のドレスを着たアリシア・ヴィキャンデル扮する若く美しい人妻ソフィアをみると、まさにフェルメールの“真珠の耳飾りの少女”そっくりだ。ちなみに、フェルメールの本名はヤンだが、本作に画家役として登場し、人妻のソフィアと恋に落ちる男の名もヤン・ファン・ロース(デイン・デハーン)だ。

他方、ソフィアの夫は年の大きく違う大富豪で有力者のコルネリス・サンツフォールト(クリストフ・ヴァルツ)だが、彼の唯一の悩みは子供に恵まれないこと。前妻の子供とは死別したため、コルネリスは孤児として修道院で育った美しい少女ソフィアと再婚し、夜毎“兵隊”を鍛えながら子づくりに励んでいたが、残念ながら未だその成果はなし。そんな焦りの中、コルネリスはちょっとした気晴らしとして画家にソフィアの肖像画を描いても

らうことを思いつき、それを実行したが、それが思わぬ波乱を招くことに……。オランダといえばチューリップ、また、オランダといえばフェルメールの絵画だが、チューリップ・バブルの時代の中、絵画がいかなる役割を？『タイタニック』（97年）では貧乏画家のジャックがローズのヌードをデッサンしたことから波乱の展開になっていったが、さて本作は？

■□■女中と魚売りの若者の恋模様は？一攫千金の夢は？■□■

本作のスクリーン上で描かれる、年上の夫コルネリスと若いソフィアとの“性生活”は微笑ましそうだが、さてコルネリスの“兵隊”の威力は？本作の主人公たちのそんな“夫婦の営み”に対して、恋人関係にあるコルネリス家の女中マリア（ホリデイ・グレインジャー）と魚売りの若者ウィレム・ブロック（ジャック・オコンネル）との恋模様（セックス模様）は奔放で迫力十分。これならすぐにでも子供が生まれそうだが、さて……。それはともかく、本作で意外だったのは、孤児たちのための社会奉仕をしている聖ウルスラ教会の大きな中庭で大量のチューリップを栽培しているうえ、そのチューリップや球根が“チューリップ取引”の大きな役割を果たしていることだ。

ある日、愛するマリアとの結婚の為、一攫千金を夢見てチューリップ売買の世界に飛び込んだウィレムは、有り金をはたいて白いチューリップの球根の所有権証明書を手に入れたが、その証明のためには聖ウルスラ教会修道院長（ジュディ・デンチ）の署名がいるらしい。そこでウィレムが修道院長を訪れると、彼が手に入れた白いチューリップの隣には白と真紅のブレイカーが咲いていたからビックリ。自ら“マリア提督”と名付けたこのチューリップによってウィレムは突然大金持ちになったが、“好事魔多し”とはウィレムのこと。ヤンと密会しているソフィアの姿を見て、それをマリアだと勘違いしたウィレムが傷心の中で酒場で荒れていると、そこで大金の入った財布まで災難に。さらに、暴れていたウィレムを捕まえた悪党たちは、ウィレムを海軍（海賊？）の中に押し込んでしまったから、ウィレムはまさに踏んだり蹴ったりだ。そんな事態によってウィレムが突然行方不明になる中、ウィレムの子供を身籠ったことを知ったマリアは、このままでは父無し子を産まざるをえないことになってしまったが、さて……。

■□■女同士のこの企みをどう考える？■□■

男は鈍感だから、若い人妻ソフィアとハンサムな画家ヤンが一目出会ったその瞬間から互いに惹かれあったことにコルネリスは気づかなかったが、女中のマリアにはすぐにピンときたらしい。したがって、その後の2人の“秘密の逢瀬”についてマリアは見えて見ぬふりをしてソフィアに協力していたが、自分の腹にウィレムの子ができたことがコルネリスにわかればきっと自分はクビに……。そこでマリアは、もしこのことをソフィアがコルネリスに打ち明ければ、自分もソフィアとヤンとの不倫をバラすと脅かす作戦に出たから、

アレレ……。この、2人の若い女同士は一見固い信頼関係で結ばれているようだが、さてその内実は？

そんな状況下、ソフィアは絶対絶命のピンチを逆に起死回生のチャンスに切り替える、“ある企み”を思いついたから、女はすごい。それは、何とマリアのお腹から生まれてくるウィレムの子供を、ソフィアのお腹から生まれてくるコルネリスの子供にしてしまうことだ。妊娠がわかれば以降、毎月母子手帳をつけながら病院に通い体調管理をしている今の時代の出産事情ならそんなことは不可能だが、17世紀のオランダでは？そして、ソルフ医師（トム・ホランダー）を強引にこの計画に巻き込み、その協力を得ることができれば……。本作中盤で見るこの“替え玉作戦”はスリル満点だが、クエンティン・タランティエーノ監督の『イングリシアス・バスターズ』（09年）『シネマ23』（17頁）で何とも陰険なナチス大佐の役がピッタリはまっていたクリストフ・ヴァルツ扮するコルネリスが本作では極めて善良な人であることもあって、2人の女は次々と危機をクリアしていくから、それに注目。そして、ついにマリアは出産の日を迎えることに……。

ちなみに、あの当時の出産は妊産婦にとって命の危険と隣り合わせの大仕事だったから、コルネリスの前の妻は子供の出産と引き換えに命を失ったらしい。そして、その時コルネリスは母子のどちらか一人だけしか助からないのなら、子供の命を救ってくれ、と神に祈ったことが今でも頭の中から離れないらしい。そのため、ソフィアとマリアがコルネリスをたぶらかして“替え玉作戦”を執行している中、コルネリスだけは全く違う価値観でソフィアの命のことを心配していたから、出産に至るストーリー展開の中のそんな“意識の差”にも注目！本作の展開を見ていると、若い女2人の出産（替え玉作戦）に向けてのしたたかさに対比して、コルネリスの善良性や単純性がよくわかる。それはともかく、ソルフ医師の協力と、2人の女の努力の甲斐あって無事女の子が誕生したから、それにて万々歳……。いやいや、映画はそこで終わることなく、更なるあっと驚く展開（企み）が続くので、それにも注目！

■□■チューリップへの投機は？肖像画に秘めた愛は？■□■

日本の昭和末期、1990年代の土地バブルは、土地基本法の制定等による“法規制”によってではなく、「不動産融資の総量規制」という“経済的規制”によって突然弾けてしまったが、17世紀のオランダにおけるチューリップ・バブルは……。？本作ではウィレムに続いてヤンもチューリップの投機に熱を上げていく姿が描かれる。つまり、ソフィアを幸せにするためにどうしてもお金が必要なヤンは、チューリップの球根を盗むためにウルスラ修道院へもぐり込んだり、球根を諦めきれず自らチューリップ売買に乗り出していたわけだが、チューリップ・バブルが弾けてしまうと……。？

他方、無事女の子を出産したのはよかったが、子供の命と引き換えに母親の命は失われたと、ソルフ医師から伝えられたうえ、ある病気のためすぐにその死体を焼却しなければ

ならないと伝えられたコルネリスは・・・？本作ラストでは、そんなあつと驚く展開の中で、登場人物1人1人の新たな生き方が提示されるので、それに注目したい。

すなわち、まず、長い間海外に飛ばされていたウィレムはオランダに戻り恋しいマリアと再会する中で、さまざまな“現在の事情”がわかってくるが、さてその中のウィレムの生き方の選択は？また、子供を産むと同時に死んでしまったとされたソフィアは、良心の呵責(?)に耐えかねてコルネリスの姿をそっと覗きに行ったものの、そこで愛しい我が子を胸に抱いている父親コルネリスの姿を見るとさてソフィアの選択は？さらに、チューリップ・バブルに狂った後、再び絵画の道に戻ったヤンの生き方の選択は？

人間の生き方はさまざまだから、本作では何よりもチューリップ・バブルが弾けた後のヤンとソフィアとの間の「肖像画に秘めた愛」の展開に注目したいが、本作のそれは如何に？予定調和的な結末に私は少し不満があるが、本作全体としての波乱万丈の展開は実によくできている。ちなみに、本作については、キネマ旬報10月下旬号でも特集しているので、ぜひそれも参照してもらいたい。

2018（平成30）年10月12日記